

美術の窓(154)

「漫画」の語の初出をめぐる

大和文華館館長 浅野秀剛

江戸時代の漫画といえば、『北斎漫画』を思い出す人が圧倒的に多いと思う。今、小学館の『日本国語大辞典』(2001年の第2版第1刷による)の「漫画」の項を開くと、①自由奔放な筆致で絵を描くこと。また、その絵。風俗画、戯画、滑稽画などの類。そぞろかき。②(英caricatureの訳語)…以下略③鳥「へらさぎ(篋鷺)」の異名。の三種掲載されている。②は、広く近現代のマンガを包含する「漫画」であり、③は鳥の名、なので、ともに省く。今回考察するのは『北斎漫画』を含む①である。

『日本国語大辞典』には、①の用例として『四季交加』(1799)…『四季交加(しきのゆきかい)』の表記の方が望ましいと思うので、以下はその表記とする。1799は1798の誤り…の序が載っている。漢文なので、それを読み下すと「平常(つねづね)舗中(みせ)に在(あ)つて梧(つくえ)に凭(より)、偶(たまたま)かの貴賤士女老少等の大路を交加(こうが)する[ゆきちがう]所を漫画し、」となる。編をし序を書いたのは山東京伝で、絵は京伝の師である北尾重政である。序によると、常々往来の人物をスケッチ(漫画)していたのは京伝で、それを基に重政が版下絵を作成したことになる。この場合の漫画は、そぞろに、つまり、秩序だてず自由に描く、という意味で用いている。

現在、「漫画」の初出は寛政10年(1798)刊『四季交加』ということになっているが、それより14年早い、天明4年(1784)版『彩画職人部類』の慶雲堂高津屋伊助の奥付広告「慶雲堂蔵板目録」(国立国会図書館蔵、図参照)に「漫画」の語は出てくる。「彩色絵本 紅翠漫画 北

尾花藍筆 箱入三冊」とあるのがそれである。紅翠と花藍は、北尾重政の号なので、「紅翠漫画」というのは「重政漫画」の意となる。ただし、『紅翠漫画』という絵本は刊行されていない。そればかりか、『慶雲堂蔵板目録』に載る9点の本のうち、刊行されたと思われるのは「彩画職人部類」だけなので、高津屋伊助は、『彩画職人部類』の再刊に合わせて、今後の計画を予告する目録を制作して添付したと推定される。そういった意味では悩ましい広告ではあるが、天明4年に高津屋伊助が重政画の彩色摺絵本を計画し、それに「漫画」と名付けていたということを疑う必要はない。

それでは、『紅翠漫画』と『四季交加』の関係はどのように解したらよいであろうか。『四季交加』の序文を信じると、漫画したのは京伝ということになるが、当時の序文は話を粉飾することが普通に行われていたので、漫画していたのが重政の可能性は全くはない。もっといえば、往来する人物を漫画したものが版元の眼に留まったというくだりそのものが虚飾で、版元、京伝、重政の話し合いで生まれた企画という可能性もある。いずれにせよ、天明4年以降、重政、京伝周辺で「漫画」という語がある程度意識されていたことは間違いないであろう。その一連の情報を北斎は知っていたと思われる。

文化11年(1814)刊『北斎漫画初編』(初編の初印本に初編の文字はない。つまり、一冊で完結する形で刊行された)の序文などによると、北斎は、神が乗り移ったかのような手(筆)で森羅万象を描き、「北斎漫画」の下絵に当てたのであり、そぞろに描いたわけではない。しかし、「北斎

漫画」の題は北斎の発案というから、北斎自身、自由に描くことができたという気分があったのであろう。その時に、往時の記憶にあった「漫画」という語を思い出したのではないであろうか。

また、『北斎漫画初編』と同じ年に、京都で、合川珉和画の『漫画百女』が刊行された。その刊記には「文化十一年戊戌九月」とあるので、それだけをみれば、「文化十一年甲戌孟春」とある『北斎漫画』は『漫画百女』より8か月早い。したがって、本の題名に「漫画」が使われたのは『北斎漫画』が最初であるという意見があるが、『割印帳』(江戸の書物問屋仲間が作成した新刊本の販売許可記録)によると、江戸の書物問屋仲間の担当が『北斎漫画』の審査をしたのは、文化十一年八月九日なので、刊行は早くとも九月頃となり、『漫画百女』とどちらが早いかは微妙となる。私は、文化十一年に、「漫画」を題名に入れた本が、江戸と京都で刊行されたということでは十分ではないかと思っている。

ここで、「漫画」を取り巻く、天明(1781~89)頃の状況について、述べてみたい。

「漫画」と類似する意味を持ち、「漫画」より早く使われていた言語に「擅画(せんが)」「縦画(じゅうが)」「漫(漫)写(まんしゃ)」がある。

「擅画」は、大坂の浮世絵師、北尾辰宣が、延享4年(1747)年刊『絵本小倉塵』から肩書に使っていたもので、「伝統に立脚しない、ほしほし自由に描く絵」の意味である。江戸の北尾重政も、明和5年刊(1768)『絵本藻塩草』から肩書に使っているが、おそらく辰宣に触発されての営為であらう。「縦画生」を肩書に用いたのは、重政と同世代の江

戸の浮世絵師、勝川春章である。「縦」にも「ほしほし」の意味があり、「縦画生」にも、「ほしほし自由を描く絵師」の意味が込められている。

「漫写」の例は、上方の絵画(肉筆画)に見出すことができる。2015年に大阪歴史博物館の特集展示で、大坂の月岡雪鼎の「唐子遊図屏風」(墨画淡彩6曲1双、個人蔵)を拝見したことがある。唐子の遊び12態を自在に描き分けた微笑ましい絵であるが、それには「法眼月岡雪鼎漫写時年六十七」と記されていた。雪鼎は自身の年齢を加算して記しているの、制作年を割り出すのは少しややこしいが、天明2年頃の作となるであろうか。今は奇想の画家の仲間入りをしている長沢芦雪にも、落款に「漫(漫)写」と記された天明後期の作品がある。それらは、刷毛で描いた絵と指で描いた絵で、常の態を超えた自在な絵の意味で用いているように思われる。

そういった、天明期の東西の画壇の空気の中かで『紅翠漫画』の企画が生まれ、それが『四季交加』の序文に連なり、『北斎漫画』という題名が誕生する契機になったと考えている。



国立国会図書館
ウェブサイトから転載

季刊 美のたより No.212

令和2年10月3日

発行 大和文華館